胃癌の増殖能と悪性度:
腫瘍増殖率の意義とその臨床応用

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-06
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 大山, 繁和
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/14906

学位授与番号	医博乙第1107号
学位授与年月日	平成2年11月7日
氏　　名	大山繁和
学位論文題目	胃癌の増殖能と悪性度：腫瘍増殖率の意義とその臨床応用
論文審査委員	主査　教授　宮崎逸夫
	副査　教授　佐々木琢磨
	教授　磨伊正義

内容の要旨および審査の結果の要旨

従来，腫瘍増殖活性の指標としては，S期細胞比率が最も良く用いられてきた。しかし，癌細胞では，DNA合成時間が延長していることが報告されており，S期細胞比率が正確に腫瘍の増殖能を表現しているかどうかはいまだ明かではない。また，癌細胞におけるDNA合成時間に関して多症例を用いた詳細な研究はみられない。そこで，本研究では，フローサイトメトリーを用いた移動追跡法という新しい細胞動態解析法にて癌組織の詳細な細胞動態解析を行った。まず，癌細胞におけるDNA合成時間の延長と関連を有する因子，癌の増殖活性を最も良く表現する因子の解析を行った。次いで，その因子と臨床病理学的因子・予後との関連を検討し，その臨床的意義について検討を加えた。さらに，生検材料を用いてその予測の可能性を検討した。得られた結果は以下のごとく要約される。

1．胃癌におけるDNA合成時間は，正常胃粘膜に比し延長しており，特にS期細胞比率が高値を示す例やDNA異数倍体腫瘍では顕著であった。DNA合成時間は，S期細胞比率，DNA指標と相関しており，重回帰分析の結果，腫瘍増殖能の最も優れた指標が，S期細胞比率とDNA指標の比であることが明かとなった。

2．臨床病理学的因子との関連において，S期細胞比率とDNA指標の比は，肝転移・リンパ節転移などと強い相関が認められ，比例ハザードモデルによる多変量解析の結果，この因子は，独立した予後規定因子であり，その重みが肝転移をも凌ぐことが明かとなった。

3．生検材料を用いた検討では，生体内での成績とよく一致した結果が得られ，S期細胞比率とDNA指標の比が生体外において予測可能であることが示された。

以上より，腫瘍増殖率が転移と密接に関連し，癌の悪性度を最もよく反映する因子であることが推察された。生検材料からの推測が可能であることより，胃癌治療における一指標として臨床応用の可能性も示唆され，有用な論文であると認められた。